文化財だより ふるさと再発見

⑥ 湿地帯植物

東濃地方の丘陵地の谷筋には、湿地が多く分布し、特に土岐市には、ミズゴケの生える大小さまざまな湿地がたくさんあります。それらの湿地は、湿地帯植物の宝庫となっています。

昭和五十一年一月に、妻木の大平をはじめ、市内六カ所の湿地帯が、市の天然記念物に指定されました。そこに自生する代表的な植物は、モウセンゴケ・イシモチソウ・ミミカキグサなどの食虫植物や、サギソウ・トキソウ・ミズギク・カキラン・サワヒヨドリ・サワギキョウ、この付近が北限とされるコモウセンゴケ、さらに伊勢湾沿岸と東濃地方にしか生育していないシラタマホシクサ・ミカワバイケソウなどがあります。また、市内各地の湿地に生息するシデコブシは、日本固有の植物で、愛知県三河地方と東濃地方にしか自生していない希少な植物です。

この地方の植物分布全般について見ると、北限の植物と南限の植物とが入れ替わる、ちょうど境目の地域になります。平地では北限の植物が繁茂し、少し山のほうへ入れば南限の植物が茂っているという様子が見られるのです。

湿地帯についても同様で、珍しい植物が多く見られるわけです。

シラタマホシクサ

教育夢発信

曽木小学校「複式学級の授業」

曽木小学校では、三年生と四年生（十三人）、五年生と六年生（十五人）で一学級という複式学級になっています。この複式学級の授業は、どのように進められているのでしょうか。

同じ教材を一緒に学ぶ ★三・四年生音楽『ふじ山』

文部省唱歌「ふじ山」を、様子を思い浮かべて歌うことを狙いとした授業です。今までに習った曲を歌って雰囲気を作り、リコーダーの練習をします。その後「様子が感じられるように声の強さを工夫して歌おう」という課題に、十三人の児童が三つのグループに分かれ、それぞれに工夫していきます。

一人一人に力をつける小集団の活動

参観された先生からは、「ドレミの階名を使って歌う・朗読→歌詞唱（グループ・全体）と、学習の筋道が明確であった」「みんなの目指す優れた歌唱をできる子がいて、学習の中心的な役割を果たしていた」と評価していただきました。

同じ教室で異なる教材を学ぶ ★五・六年生国語『熟語作り』（五年）『やまなし』（六年）

六年生の中心教材である「やまなし」に重点をかけるために、五年生には「熟語作り」などを組み合わせて、複式学級のための授業計画を作成しました。授業は、担任が主に六年生の学習を指導し、補助の先生が五年生を指導するという変則ティームティーチングで行いました。こうした工夫によって、一人の担任で二学年を同時に指導する難しさを解決しています。

学校を訪問された先生方からは、「子どもたちの姿が、素晴らしい」（あいさつ・ノートの工夫・全員挙手全員発言・場に応じた声の大きさ・時間いっぱいの練習）など、日ごろの学習の成果をたくさん誉めていただいています。